

インターネット依存傾向とパーソナル・スペースの広狭について

About the dependent trend of the Internet and the area of personal space

齋藤晶子

Akiko SAITO

愛知教育大学 教育学部 現代学芸課程 情報科学コース

Aichi University of Education Faculty of Education Programs in Contemporary Liberal Arts and Sciences
Informatics and Communication Technology

Email:s2100868@auecc.aichi-edu.ac.jp

あらまし：情報機器の利用が人に及ぼす影響として、インターネット依存傾向、インターネット依存度とパーソナル・スペースの関係性を明らかにするため、愛知教育大学の学部生を対象に調査を行なった。その結果、インターネット依存型と親和欲求の関係が明らかになった。

キーワード：情報機器、インターネット依存、パーソナル・スペース、親和欲求、コミュニケーション

1. はじめに

「インターネット依存」という言葉は、過度なインターネットへの干渉が日常生活を脅かすものとして人々に認識されている。しかしながら、人々に取り上げられる「インターネット依存」とは、インターネット依存度に注目したものが大半を占め、インターネット依存の傾向（以下ではインターネット依存型とする）について触れられているものは極少なく、研究の余地があることが考えられる。

そこで本研究では、以下の点に注目して調査をすることとした。すなわち、インターネット依存度、インターネット依存型、インターネット依存度・依存型別による日常生活の違い、等である。

ここで取り上げる日常生活の違いとはパーソナル・スペースを指標とした対人関係についてである。パーソナル・スペースを用いることとしたのは、パーソナル・スペースは対人関係において誰もが持ちうるものであるからである。

2. 調査の概要

2.1. 調査対象

この調査は愛知教育大学の学部生を対象にして行なった。男子学生 31 名、女子学生 15 名、合計 46 名であった。うち男子学生 1 名は測定不可であった。

2.2. インターネット依存度に関する質問紙

インターネット依存度については、Young (1996) のインターネット依存度テスト (IAT) を使用した。

2.3. インターネット依存型に関する質問紙

インターネット依存型は、リアルタイム型ネット依存、メッセージ型ネット依存、コンテンツ型ネット依存の 3 つに分けられる (大野ほか 2011)。

質問紙では、各依存型で使用されるウェブサービスについて、使用頻度に応じて各項目 10 点満点で被験者自身に得点をつけさせた。最も得点の高い型を被験者の属する依存型とした。

2.4. パーソナル・スペースに関する質問紙

パーソナル・スペースを測定する調査には MAPS 人格投影法を用いた。MAPS 人格投影法とは、状況作成物語検査とも呼ばれ、複数の背景から 1 つの背景を選択し、その上に切り抜き人形を配置し、物語を作らせる検査法である。この検査法では、パーソナル・スペースの広狭および親和欲求 (他の人と一緒にいようとする欲求) を測定することが出来る (渋谷 1994)。

本研究では、4 つの背景 (①街路, ②教室, ③森, ④海岸) と人物の切り抜き画像 16 個を使用した。

3. 結果と考察

3.1. インターネット依存度に関する分析

インターネット依存度の得点については、最低点は 20 点、最高点は 78 点、平均点は約 40.5 点であった。なお、得点が高い程、依存度も高くなる。

3.2. インターネット依存型に関する分析

各依存型の得点の平均点は、リアルタイム型が 7.61 点、メッセージ型が 12.61 点、コンテンツ型が 19.46 点となった。また、リアルタイム型とメッセージ型は双方向コミュニケーションをとるという特徴を持つため、まとめて算出したところ該当する被験者は 12 名となり、コンテンツ型は 33 名となった。

以後、インターネット依存型のリアルタイム型とメッセージ型を、便宜上リアルタイム・メッセージ型と表記する。

3.3. 親和欲求に関する分析

MAPS 人格投影法による調査の結果、被験者の大半が図 1 のように、人物の切り抜き画像を画像の枠（長方形）に合わせて一直線に並べたことから、画像間の距離に個人差が表れなかったため測定できなかった。そのため、パーソナル・スペースではなく親和欲求を測定し得点化した。その結果、平均点は 12.49 点、最低得点は 5 点、最高得点は 25 点であった。

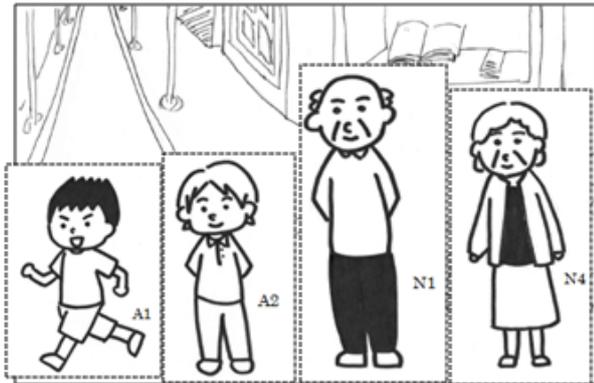


図 1 MAPS 人格投影法の実験結果の例
(人物画像の枠を点線で表示)

3.4. インターネット依存型とインターネット依存度に関する分析

インターネット依存型とインターネット依存度について、t 検定による分析の結果、有意差は見られなかった ($t(43) = .897, p > .05$)。

よって、それぞれのインターネット依存型に属する被験者のインターネット依存度には特に違いがないということが考えられる。

3.5. インターネット依存型と親和欲求に関する分析

インターネット依存型別にみた親和欲求得点の平均点は、リアルタイム・メッセージ型のほうがコンテンツ型よりも高かった。また、t 検定で分析した結果、有意傾向が見られた ($t(43) = .897, .05 < p < .1$)。

よって、リアルタイム・メッセージ型の被験者は親和欲求得点が高く、インターネット上でも現実においても他人とコミュニケーションをとろうとする傾向にあるということ、コンテンツ型の被験者は親和欲求得点が低く、インターネット上でも現実においても対人関係において他者と関わろうとする傾向が見られないということが考えられる。

3.6. インターネット依存度と親和欲求に関する分析

インターネット依存度と親和欲求の得点の相関係数を算出したところ、相関係数 $r = -.182$ であった。

さらに、散布図 (図 2) より、インターネット依存度と親和欲求は無相関であることが分かった。よって、インターネット依存度の高さは親和欲求に影響がないということが分かった。

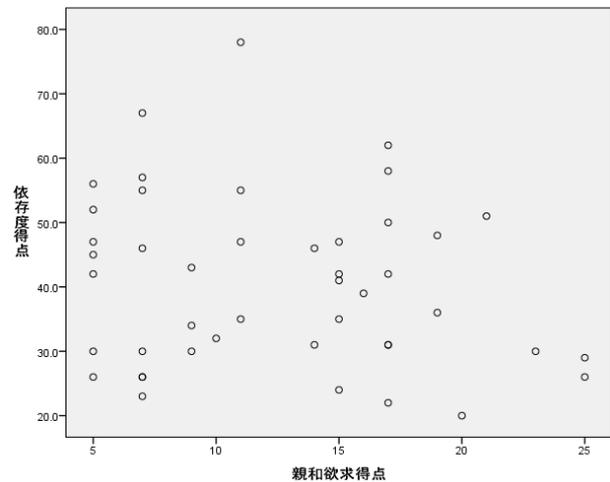


図 2 インターネット依存度得点と親和欲求得点の散布図

4. まとめ

本研究で、愛知教育大学の学部生 45 名を対象に、インターネット依存度、インターネット依存型、親和欲求について分析した結果、インターネット依存型と親和欲求の関係を明らかにすることが出来た。インターネット依存型に関して、影響を与える要因は親和欲求であり、インターネット依存度ではなかった。その一方で、インターネット利用が人間に与える影響については、他に身体的なものや精神的なものなど、まだまだたくさんあると考えられる。よって、今後もインターネットの利用に関する研究を進める必要があると思われる。

参考文献

- (1) 独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター：“ネット依存のスクリーニングテスト” (2014-01-13) http://www.kurihama-med.jp/tiar/tiar_07.html
- (2) 渋谷昌三：“人と人との快適距離—パーソナル・スペースとは何か”，日本放送出版協会 (1990)
- (3) 渋谷昌三：“MAPS 人格投影法と親和欲求との関連性”，山梨医大紀要，第 11 巻，pp.24-28 (1994)
- (4) 大野志郎，小室広佐子，橋元良明，小笠原盛浩，堀川裕介：“ネット依存の若者たち，21 人インタビュー調査”，東京大学大学院情報学環情報学研究。調査研究編 27，pp101-139 (2011)